

日本海水学会第8回若手の集い

「海水淡水化技術の現状と将来」を終えて

外輪 健一郎*

6月5、6日の日程で長崎市において開催された日本海水学会第59年會に続き、佐世保市のハウステンボスにおいて日本海水学会若手會主催の第8回若手の集いが翌6月7日に開催された。平成4年にオープンしたハウステンボスは淡水化施設を有しているが、淡水化技術はそれ以来絶え間なく進歩を続けている。そこで今回の集いでは、淡水化技術の進歩について着目し、「海水淡水化技術の現状と将来」というテーマを掲げて、講演會と見學會を開催することとした。参加者の関心は高く、學會終了後の土曜日であったにも関わらず定員30名の募集に対して合計35名の参加があった。

講演會では、まず長崎県水環境対策課の浅田要一郎氏によって長崎県の水事情の説明が行われた。長崎県では、河川延長が短いことから渇水になりやすいこと、さらに離島地域への水の供給が課題となっているという実情を説明いただいた上で海水淡水化技術について言及された。福岡では供給量が大きいため採算がとれるが、長崎が必要としているような小規模なプラントではコストが高くなってしまふ等の問題で導入が進んでいないという説明を頂いた。

次に講演を頂いた三菱重工の松井克憲氏は、ハウステンボスの淡水化施設の建設に直接携わった方である。今回は、「ハウステンボスの海水淡水化設備とその後の技術の進歩」と題した講演を行っていただき、ハウステンボスの淡水化施設の概要のほか、最新の大型淡水化施設の建設状況について詳細な説明を頂いた。

東洋紡の熊野淳夫氏には、イオン交換モジュールの最新技術についての講演を頂いた。イオン交換膜そのものの性能向上にむけた取り組みのほかに、流体力学に基づいたモジュールの設計も解説していただき、イオン交換膜の技術が真に多くの技術の結集であることが分かった。

午前中の最後、すなわち見学直前の講演は、ハウステンボスの林田幸則氏によるもので、ハウステンボスと環境との関わりについて紹介頂いた。ハウステンボスの土地はもともと工業団地用として造成されたが、荒れ放題



講演會の様子



見學會の様子（淡水化施設）

* 徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部（〒770-8506 徳島市南常三島町2-1）
Tel: 088-656-4440, E-mail: sotowa@chem.tokushima-u.ac.jp

であった。ここの土を入れ替えることからハウステンボスの環境への取り組みが始まって、現在ではエネルギーやゴミなどの点で様々な取り組みが行われている点は興味深かった。また、平成6年の渇水の際に大いなる威力を発揮した淡水化施設の稼働実績を紹介していただいた。

午後の見学会では、ハウステンボスの淡水化施設および環境施設を見学した。淡水化施設は既に止まっていて、今後も動かす予定が無いそうである。今となってはコンパクトな装置に見受けられたが、全体をよく理解することができた。

海水学会が開催された長崎からハウステンボスへの移動はバスで一時間以上を要する。通常の講演会では現地集合とする場合が多いが、今回は現地集合とするには忍びなく、貸切バスを用意した。こうなると主催者としては如何に時間をマネジメントするかが重要となる。参加者の皆さんが集合時間にきちんと集まって下さり、ハウステンボスに到着したところまでは良かったが、ハウステンボス場内での移動が予想外に長い時間を必要としたため、午前中のプログラムは15分程度遅れて進行した。このため、お昼の休憩時間は30分余りしか取ることができなかった。勉強に来たとはいえ、お昼休憩の一時間ぐらいはハウステンボスでの買い物、見物を楽しんで頂こうという計画は失敗に終わった。また、若手の集い終了後にハウステンボスに残って一泊する参加者がおられるかと予想されたが、全員が帰路につかれた。若手の集い参加者のまじめな一面を窺うことができた。

また、若手の集いに先立って、6月6日の学会終了後には懇親会も開催した。中尾会長をお誘いしたところ快くご参加下さり、乾杯の御発声を頂くことができたのは幸運であった。

なお、今回の集いの企画運営にあたっては多くの方のご支援をいただいた。アクアシステムズの岸正弘氏には講演会の企画に関する適切なお助言を頂いただけでなく、講師選定にあたってご尽力いただいた。お陰様で有益な講演会を開催することができた。市村重俊氏（神奈川工科大学）、正岡功士氏（海水総合研究所）、松本真和氏（千葉工業大学）、小川襲氏（ダイヤソルト）には企画や運営に関して多くのアドバイス及び協力をいただいた。また、ソルトサイエンス研究財団には講演会の共催団体としてご支援いただいた。皆様のご支援に改めて感謝いたします。



第8回若手の集い集合写真（ハウステンボスにて）